



# この人を たずねて

北海道医療大学心理科学部教授

## 近藤清美氏

インタビュー  
伊藤圭子



### Profile — こんどう きよみ

1985年、大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。ニューヨーク州立大学ストーニブルック校博士研究員、皇學館大学社会福祉学部助教授を経て、2002年より現職。学術博士、臨床心理士、臨床発達心理士。専門は発達心理学、臨床心理学。主な著書は、『情動的な人間関係の問題への対応』（分担執筆、金子書房）など。

### ■ 近藤先生へのインタビュー

——心理学に興味を持ったきっかけなど、お聞かせいただけますか。

私はもともと児童の福祉に興味があって、何を間違えたのか、大阪大学人間科学部行動学専攻に入ったのですが、当時、阪大では学園紛争がまだあって、入学したものの授業がほとんどなかったのです。そんな中で、わずかに開講していた授業で出会ったのが、糸魚川直祐先生とサルの子関係の比較行動学的研究でした。子どもの臨床からは遠いのですが、まず、基礎研究からと思い直しました。そのうち研究がおもしろくなって、大学院に進み、今はそういう研究は倫理的にできないのですが、サルの子の隔離飼育実験をしました。そこで随分とサルの子を育てました。

——その後先生はNYのストーニブルックに行かれたんですね。

私は早くに学生結婚をしたんですが、彼が先にアメリカに留学することになりました。その後を追いかけてきました。その頃、NYの

ストーニブルックにエインズワースの最後の弟子だったウォーターズがアタッチメントの研究をしていたので、自分で直接かけ合って、ポスドク（博士研究員）にしてみました。ちょうどウォーターズもサルの研究ができる人を探していた、といったような出会いがあったんです。ラッキーでしたね。そこで、Q-Sortをサルで使えるか、というテーマを与えられて、テキサス州に移植されたニホンザルを対象に研究をしました。——アメリカで2年半くらい過ごされて帰国されたんですね。

日本に帰ってから学芸大の発達障害の研究室に療育のボランティアに入ったり、保健所の発達相談員として働いたり、いろいろな勉強会に参加させてもらったり、学振の特別研究員になってサルや人間のアタッチメントの研究も続けていました。その当時、オランダからアタッチメントの研究にきていた博士課程の研究者がいて、その方の博士論文を手伝いながら、アタッチメント Q-Sort という測定法が日本で使えるのかどうか、

といった文化間比較研究をやったりしていました。

——人間のアタッチメント研究との出会いはいつだったんですね。最近取り組んでいらっしゃる研究やプロジェクトはどんなものですか。

母子関係について妊娠前からの長期縦断研究に取り組んで、今は6歳児研究をしています。アタッチメントに関する評定方法などは、きちんと基準に従って、バックグラウンドと経験のある評定者にやってもらわなければなりませんし、時間がかかるんです。子どもはどんどん育っていきますし、なかなか大変です。

——アタッチメント研究の最近の動向と今後の展開についてお話しいただけますか。

もともとはベーシックな基礎研究ですが、最近だんだん臨床的になってきつつありますね。国際児童研究学会（SRCD）というアメリカの研究学会があって参加する予定なのですが、アタッチメントの研究者が集まるプレカンファレンスでの今年のタイトルが、「No research without therapy, no therapy without research」なんです。このスタンスは、わが国の臨床心理学に必要ではないかと思えますね。今のアタッチメント研究はかなり介入中心になっています。私が今やっている臨床研究でも、ビデオフィードバックにより、お母さんの感性を高める、といったようなものを行っています。アタッチメント研究はやり尽くされた感じがあるけど、抜けている分野が、大人どうしの親子関係や高齢者におけるアタッチメントですね。人間は一生、誰でもアタッチメントを持っているんです。日本では、アタッチメントがいろいろな意味で誤解されているところがあります。あまりにも母親に特化しているため、母性神話とくっついてしまったり、スキンシップな

どと同義とされたり。アタッチメントさえ安定すれば発達は全部成功する、とか逆にアタッチメントが形成されなかったらその後は全く失敗、のような論調さえあります。こうした甚だしい誤解は解いていきたいな、と思います。また、脳科学や遺伝学など、生理的ベースでの研究がどんどん進んで、アタッチメント研究でもそういう視点での研究がたくさん出てきましたが、問題なのは、それがアタッチメントなのか、対人的な親和性のようなものを扱っているのか、混沌としていることです。今後はきちんと整理していかないといいません。

——これから心理学をめざす人へ何かメッセージをお願いいたします。

臨床教育の難しいところは、研究だけでも、実践力だけでもダメだ、ということです。それから、臨床ではどうも経験主義的になりがちで、だから私は必ず新しいものの、最新のものを学生さんたちに提供したいと思っています。メッセージとしては、やはり私たちは表現者だと思います。何か新しいことを世の中に表現していこうと。自分のやっていることを科学的に表現しながら新しいものをつくっていく、クリエイティブな仕事が研究者だと思います。すでにあるものを崇めたてまつっているのとは話が違うと思うんです。

### ■ インタビュアーの自己紹介

#### インタビューを行った感想

今回、北海道医療大学に近藤先生を訪ね、インタビューする機会をいただきました。近藤先生といえばアタッチメント、といったイメージを持っていましたが、実際、この理論発展の歴史的流れ——第一世代：ホスピタリズムのボウルビー、第二世代：行動システムのエインズワース、第三世代：ミネソタ縦断研究、そして第四世代：

愛着研究成果の臨床応用——といったものと、近藤先生の歩まれた道筋——サルの隔離実験から行動システム観察、縦断研究と臨床応用——と、まるでアタッチメント理論の歩みと並行して歩いて来られたようだ、という感想を持ちました。また、近藤先生のように知識—研究—臨床現場といった、サイエンティスト—プラクティショナーモデルを地で行っている臨床教育者は、特に女性は日本ではまだまだ少数派なのではないかと思っています。インタビューでは、当時海外に出られてから日本に帰国し、女性として、あるいは母親として日本のアカデミアでのメインストリームを一旦離れてUターンした研究者としてのご苦労を伺い、感慨深く、共感した点が多々ありました。近藤先生のようにさまざまな障壁を乗り越えてご活躍の先達へのインタビューは刺激的で楽しいものでした。こころより感謝いたします。

#### 心理学との出会い

今回、近藤先生がインタビューの中でお話しくださったのと同じように、私もさまざまな出会いを重ねることによって、研究の興味が少しずつ形づくられてきたように思います。専門は臨床心理学と発達心理学ですが、人間の問題というのは何にでも関連があるわけで、あれもこれもと興味は広まってきました。それを統合させるのに非常に時間がかかりましたし、その作業は今でも続いています。修士課程のときに、J. フィニー先生のもとでアイデンティティ

ーと発達について研究したのが最初でした。その後、博士課程ではA. バンデュラ先生のもとでセルフ・エフィカシーと主体 (Agency) について研究していました。同時にアメリカでは自分自身が民族的マイノリティーであったこともあって、H. マーカス先生のとこで文化とセルフ、文化適応についての研究にかかりました。多様な臨床現場での経験も相まって、その当時は興味対象がバラバラで全く統一感がないように感じていましたが、ようやく最近になってから点や線が絵になりつつあり、全てが関係しあっていたのだと感じています。恩師のJ. D. クランボルト先生が言っていた、ブランド・ハプスタンス、まさに私自身が偶発性をつくり続けてここまで来たのかもしれない。

#### 関心と今後挑戦してみたい研究

これまで、子どもの発達問題をその子どもを取り巻く環境 (家族や学校、社会、文化) の中で捉える、といった視点から研究や臨床の現場に応用してきました。現在は、そのメカニズムについて興味があり、ADHD や自閉症傾向のある方々の身体機能と社会的認知機能 (顔認知や共感など) との関係进行研究しています。こういった切り口から、自と他の関係における主体 (Agency) ということについての考察を深めたいと思っています。他に、今後の取り組みとして、情動動機とセルフ・エフィカシー、そして行動との関係をより詳しく調べ、臨床現場での応用につなげていければ、と思っています。



#### Profile — いう けいこ

UCLA アジア家族研究所を経て、スタンフォード大学で博士号を取得し、サンフランシスコ市/郡の精神保健局などに勤務。日本に帰国し、現在は北海道大学社会科学実験研究センター博士研究員。臨床心理士。発達障害や学習障害の子どもとその家族の研究、文化適応、PTSD (児童虐待など)、思春期の摂食障害・うつ病予防などについての研究を行っている。